

# モーツァルトとクジラ(MOZART & THE WHALE)

2007(平成19)年2月14日鑑賞<東映試写室>

★★★★



監督=ピーター・ネス/脚本=ロナルド・バス/出演=ジョシュ・ハートネット/ラダ・ミッチェル/ゲイリー・コール/ジョン・キャロル・リンチ/シーラ・ケリー/エリカ・リーセン/ロバート・ウィズダム (アートポート配給/2004年アメリカ映画/94分)

## 第4章

現代の世相を映し出す

……アスペルガー症候群とは「知的障害のない自閉症」だが、やっと20年前に病気とされたもので、なじみの薄いもの。この映画は、そんな疾患を持った男女の恋を描く中で、アスペルガー症候群を考えさせる問題提起作！ 考えるべきポイントは、何が普通なのか？ なぜ普通を求めるのか？ 普通でないことはダメなのか？ ということだが、こりゃ難しい……。ちなみに、織田信長もベートーヴェンもアスペルガー症候群だったそうで、そう聞かされるとその判断はよけい難しい……？

### すごい問題提起作が登場！

この映画は、ドナルド（ジョシュ・ハートネット）とイザベル（ラダ・ミッチェル）との、恋と別れをくり返す不器用な恋愛模様を綴りながら、アスペルガー症候群とは何か？ そんな「障害」とどのように向き合いながら生きていけばいいの？ などを世に問う問題提起作！ そしてこの映画は、実在の人物の実話にもとづく物語！

といっても、この映画のモデルとなった1948年生まれのジェリー・ニューポートは、友人の精神科医から薦められてダスティン・ホフマンが自閉症の主人公を演じた『レインマン』（88年）を観たことがきっかけとなって、自分がアスペルガー症候群だとはじめて気づいたということだから、正常と病気との境界はきわめてあいまいなもの。

そのうえ、プレスシートによると、何と「20年前までこの病気が存在すること

は知られていなかった」とのこと。そんなアスペルガー症候群って一体ナニ……？

## 世界の著名人が多数……

アスペルガー症候群とはそういう病気だと言われると、自我が強く、我が道を押し通すことに価値があると考えている私もひょっとして軽いアスペルガー症候群ではないの、とつい考えてしまったが……？　そこで、プレスシートを見てビックリ！　いるわ、いるわアスペルガー症候群の著名人が……。

あえて全部並べてみると、アスペルガー症候群だったと言われている著名人は、アルバート・アインシュタイン、レオナルド・ダ・ヴィンチ、トーマス・エジソン、ガリレオ・ガリレイ、アレクサンダー・グラハム・ベル、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン、サー・アイザック・ニュートン、織田信長、野口英世、司馬凌海らがズラリと……。なるほど織田信長もこの病気だったのかと考えると納得できることばかり……？

しかし、こんな天才がずらりと並ぶと、おいおい、アスペルガー症候群ってホントに病気なのとつい言いたくなってくるが……？

## ドナルドとイザベルは？

プレスシートによると、アスペルガー症候群は一般的に、『知的障害のない自閉症』とされ、特定の分野では秀でた才能を発揮するが、対人関係や理論的な思考に不具合が生ずる発達障害の一種」とのこと。この映画に登場するドナルドは数学の天才、というより数字の天才で、いわば、『博士の愛した数式』（06年）に登場した博士のようなもの……。

他方、ヒロインのイザベルは絵と音楽の天才。ところが、この2人はともにアスペルガー症候群と診断されている。その両極端な「症状」はストーリー展開の中で少しずつ紹介されるが、要するに2人とも「普通ではない」ということだ。

「普通ではない」というのは、ある意味誉め言葉で、その最高峰が「天才」。しかしこれを悪くいうと、①協調性・社会性の欠如、②コミュニケーション能力の不足、③特定の分野への固執と他分野への無関心で、その行くつくところが「変

な奴」……？ 要するにドナルドもイザベルもそういう人間というわけだ。

## ドナルドは集会を主催しているが……

冒頭、タクシー運転手として乗務しているドナルドの姿が映し出されるが、後部座席に座っている2人の乗客に対して、彼が一方的に話しかけている姿を見ると、やはりちょっと異様。乗客がこれを無視していると、ドナルドはよけいにしゃべりたくなるのか、前方の注視が疎かになるほど後ろを向いてしゃべっているから、「危ないナ」と思っていると、案の定……？

交通事故を起こした場合の心得として、被害者の救援と警察への連絡が第1だが、ドナルドにとってはそれよりも「これでは今日の集会に遅れる」という心配の方が重大らしく、被害者も車も放置して現場を去り、集会へ。その集会とは、ドナルドが主催しているアスペルガー症候群患者らが定期的集まるもの。禁酒のための話し合いのグループ、薬物依存から逃れるための話し合いのグループなど、最近この手の集会が増えているが、これは要するに共通の悩みを話し合う中で、少しでも社会に適応できるように自分を変えていこうという試み……。

## 普通がいい、それとも普通でない方がいい？

こんなドナルドは普通でない自分を何とか普通にしたいと努力しているタイプだが、この集会に新しく参加してきたイザベルは、自分が普通でないことを前提として、そんな自分が社会の中でどう生きていくのかを模索しているタイプ。

また、ドナルドの欠陥は数字のことを考えていると他人のことが見えなくなるという、協調性・社会性・コミュニケーション能力の欠如だが、新規参加者のイザベルが語る自らの欠陥は、「他人の言うことをありのままに解釈してしまうこと」。しかし、多分これだけでは、それがどんな欠陥かわかりにくいはずだから、その欠陥ぶりはスクリーン上でじっくりと……。

## その他の登場人物は……？

この映画のテーマは1つだけに絞られているから、上映時間も1時間34分と短い、2人の主人公以外の登場人物は、アスペルガー症候群の特徴をより観客に

理解させるため程度の役割……？ プレスシートを見てもその名前と顔が一致しないため紹介しづらいが、ドナルドが主催している集会には、グレゴリー（ジョン・キャロル・リンチ）の他、ジャニス（シーラ・ケリー）、ブロンウィン（エリカ・リーセン）、ブルーム（ロバート・ウィズダム）らの男女とり混ぜた個性溢れる（？）アスペルガー症候群の患者たちが、毎回参集している。

2人だけの会話なら、そのすれ違いの面白さやおかしさも理解できるが、5人も6人ものアスペルガー症候群の患者が集まり、それぞれが他人の話すことに関心を示さず、自分の言いたいことばかりをしゃべっている姿を見ていると、たしかに異様。真面目にそれを聞いていると、私の頭もおかしくなりそう……？ ある時点で、イザベルを担当している精神科医がドナルドに対して、「今後絶対、彼女に連絡することを中止するように」と指示したのも当然と私は思うのだが、現実……？

ことほどさように、アスペルガー症候群の患者の「治療」方法は難しいことを痛感……。

## 別れと再会のくり返し……？

古今東西、恋愛ドラマは数多くあるが、アスペルガー症候群患者同士の恋愛ドラマはきっとこれがはじめて……。「他人の言うことをありのままに解釈してしまう」うえ、思ったことを率直に語るイザベル流では、セックスに関する会話も奔放で露骨。やっと「前回のセックスはずっと以前だった」と答えたドナルドに対する、イザベルのセックス談義は機関銃のようで、観客席から観ているとこんな2人がホントにうまくいくの、と心配になるはず……。

2人の最初のセックスはドナルドの部屋の中だったが、そういうシチュエーションになったのは99%イザベルのリードによるもの……。どんなカップルでも、恋愛モードに入った後ケンカと仲直りをくり返すのはやむを得ないが、この2人の場合はその激しさがケタ違いで、別れと再会のくり返し。その様子がこの映画の見どころ（？）なのだが、「普通」の観客にはそれがわかりづらいのが玉にキズ……。

## 2人のケンカを1つだけ紹介……

この映画では دونالدとイザベルのケンカの様子がかなりのウエイトを占めているが、その最大規模のものが、イザベルの世話によって、やっと Donaldの数字の才能を活かせる職場に就職できた Donaldの上司ハンク（ゲイリー・コール）を招いた時のケンカ。

イザベルによる積極的な提案によって、たくさんの鳥たちを含む新居での2人の共同生活が始まり、Donaldの仕事もやっと定着してきた頃、Donaldは遠慮がちにイザベルに対して、今日は上司を食事に招待したから「感じよく応対してくれるよう」頼んだのが、コトの発端。イザベルにしてみれば、共同生活をしている2人は共にアスペルガー症候群という障害を持った人間であることを当然の前提としていたにもかかわらず、Donaldは今なおその障害を上司に隠そうとし、上司を招待している間は「普通」を装ってくれとイザベルに依頼したわけだから、イザベルは頭にくるに決まっている……？ こんな場面は普通のサラリーマン家庭でもよくあるはずだが、普通は(?) それなりに妻が我慢し夫の顔をたてることによってコトなきを得るものだが、イザベルの場合はそうはいかなかった……。

Donaldが朝出かける時は「わかったわ」と答えておきながら、Donaldが上司のハンクと共に家のドアを開けると、イザベルの対応は激変。これではハンクはひと言も発することができないまま、ハンクのご招待は最悪の結果に……。

## この映画のタイトルは……？

アメリカには「ハロウィン」という行事があることをご存知だと思うが、これは、カトリックの諸聖人の日（万聖節）の前晩（10月31日）に行われる、英語圏の伝統行事で、『イン・アメリカ～三つの小さな願いごと』（03年）にも登場していたもの。この映画のタイトルとなっている『モーツァルトとクジラ』は、ハロウィン当日の2人の衣装を指している。すなわち、クジラに変装したのが Donaldで、モーツァルトに変装したのがイザベルだが、すんなりと仮装してハロウィンの雰囲気を楽しめないのが Donaldの症状……？ しかし、まあ考えてみれば、モーツァルトとクジラが仲良くなること自体、そもそも無理なのかも……？

## 大切なことは、理解すること

同じ人間であっても、男性と女性は「異性」で、異なるもの。これは生物学的・生理学的に明らかに異なっているから誰にでもわかるが、実はこれだって、MtF (Male to Female) (身体的には男性であるが性自認が女性であるケース) と FtM (Female to Male) (身体的には女性であるが性自認が男性であるケース) というグレーゾーンがあり、自分がどちらの性に属しているのかと悩む人も多らしい……。

それと同じように (?), 同じ人間であっても性格や能力はみんなそれぞれ異なるもの。したがって、「普通」という範疇をいくら広げたとしても、その中に入りきれない両極端な変わり者・ヘンな奴は必ずいるはず……。そんな両極端な2人が恋に落ちた時、大切なことは、異なる人間を異なる人間として互いに理解すること。この映画が訴えたいことは、要するにそういうこと！

そう考えてみれば、かつてのベトナム戦争や近時のイラク戦争は、世界の超大国アメリカを中心としたキリスト教的価値観と、イスラム教的価値観の対立が根本にあることは明らか。そして、その場合に大切なことは、異なる宗教、異なる価値観を互いに理解すること。もちろんそれはわかっているのだが、問題は現実にはそれが難しいということ。だって、ドナルドとイザベルだって、何度もこれは決定的と言えるようなケンカや別れをくり返していたのだから……。しかし、それでも……？

2007(平成19)年2月16日記

### 表紙撮影の舞台裏（3）

今回も『パート7』『パート12』に続いて同タイトルのコラムを書くことに。『シネマルーム』の表紙をどうするかは毎回悩みのタネだが、『パート11』以降始まったのが「坂和弁護士の素顔シリーズ」。その第1弾は、『パート11』における自転車のハンドルを手にしたスーツ姿の坂和弁護士だが、文芸社の07年2月における月刊帯文選評会では、その帯文がベスト6位に入るとともに、帯文プロジェクト委員賞を受賞した。

そこで、『パート13』ではそれに続く素顔シリーズを企画し、都市問題の専門家という特色を生かして、通天閣や大阪城の前に立つ構想や、適塾の前での撮影というチャレンジも。

しかし今回の最大の特徴は、2冊の同時刊行だから、表紙もそれにピッタリのものにしなければ。そこで浮かんだのが、試写室の中で対照的な位置に座る、チョイ不良オヤジ SHOW-HEY と社会派弁護士章平を対で見せるという発想。そうすると、『パート13』と『パート14』が書店に平積みされた場合よく目立ちインパクトがある、と狙いを定めたわけだ。その結果、女性向けの『パート13』には、ノーネクタイでワイシャツの第1ボタンを外し、白い上着をカッコ良く着こなしたチョ

イ不良オヤジの姿が。他方、男性向けの『パート14』には、きちんとネクタイを締め、カフスボタンを光らせた凛々しい社会派弁護士の姿がそれぞれ登場した。

表紙写真の撮影は、何度も経験を重ねてくるとモデルはもちろん、カメラマンや照明係さらに衣装係や化粧係(?)も手馴れたものとなり、次第にプロの域に? 高級一眼レフデジカメが庶民のものになった昨今は実に便利なもので、撮影とチェックをくり返すことによって、ベストアングルとベストポーズの決定が容易にできるようになった。もちろん今や、モデルの笑顔づくりもプロ並みに(?)手馴れたものの。

ちなみに今回撮影したのは、6月15日に初試写が実施された四ツ橋沿いの一等地京富ビル8階にある、株式会社ギャガ・コミュニケーションズの試写室。7月から本格稼働とのことだったが、念願の試写室誕生の喜びを共有しながら、私たちの事務所のスタッフが表紙写真の撮影に専念したのは6月19日の午前中。タツプリ2時間かけた表紙撮影は楽しいものだったが、さてその出来は? 読者の皆様のご感想を是非お伺いしたいものだが……。

2007(平成19)年7月13日